

伊能忠敬年譜

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
1	1710(宝永07)		忠敬の父、神保(じんぼ)貞恒、大内蔵宗重の三男として生まる	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p195
2	1723(享保08)		ミチの母、平山タミ生まる	
3	1735(享保20)		頃、神保貞恒(25歳)、小関五郎左衛門家のミネ(峰)に入り婿	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p11
4	1737(元文02)		貞恒(27歳)の長男、貞詮(さだあき。忠敬の兄)生まる	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p11
5	1741(寛保01)		タミ、ミチを出生(19歳)	
6	1742(寛保02)		貞恒(32歳)、松尾芭蕉の系譜に連なる佐久間柳居に入門、都船(とせん)と号す	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p11
7	1742. 03. 25(寛保02. 02. 19)		9代目伊能長由37歳で没。妻タミ(民)〔南中村(現香取郡多古町南中)の平山藤右衛門秀暁(ひであき)の娘。季忠(すえただ)は兄〔1775(安永04. 02)没(65歳)〕。生家は、こてこての日蓮宗〕は20歳で未亡人となる。タミは日蓮宗に固執していたため、伊能家当主昌雄〔長由は昌雄の末弟〕により、四十九日が過ぎてから、2歳のミチ(達)とともに、南中村の実家に帰される	『伊能忠敬研究』2003. 01. 27第31号p18(小島一仁)「家牒(四)」
8	1743(寛保03)		7代目伊能昌雄(まさお)没(53歳か)。これで伊能家は当主不在となり、経営は親戚に任せられた	『伊能忠敬研究』2001. 08. 01第26号p59(渡辺一郎)「新・伊能忠敬物語(一)」
9	1744. 04. 19(延享01. 03. 07)		平山藤右衛門秀暁没(55歳)。タミの兄季忠(34歳)が家督相続	
10	1745. 02. 11(延享02. 01. 11)	0	伊能忠敬、小関(こせき)三治郎として、上総国山辺郡小関村(こせき(こぜき)むら。現山武郡九十九里町小関)の名主・小関五郎左衛門家の長女小関ミネ(峰)と、入り婿の父・貞恒(さだつね)〔1710~1782年〕との次男(第3子。末っ子)として生まる〔父35歳〕	
11	1752(宝暦01. 12)	6	実母・小関ミネ(峰)死去(享年不詳)。父貞恒(41歳)は、兄貞詮(さだあき。14歳)と姉フサ(房。11歳)を連れて、武射(むさ)郡小堤村(おんづみむら。現山武郡横芝光町小堤)の実家の、名主・神保(じんぼ)理左衛門家に帰る。6歳の三治郎は小関家に託され残る〔小関家で、読み書きそろばんは、しっかり学ばせてもらったと思われる〕	
12	1754. 06. 18(宝暦04. 04. 28)	9	看防(当主不在の伊能家に夫婦で移り住み、ミチ(達)成人まで、家業の差配をしていた親戚)の伊能七左衛門清茂(妻リヨは長由の妹)死去	『伊能忠敬研究』2005. 08. 09第41号p36(小島一仁)「旌門金鏡類録(八)」。『伊能忠敬研究』2003. 07. 23第33号p54(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(二)」。『伊能忠敬研究』2013. 02. 28第68号p15(伊能楯雄)「伊能忠敬史跡めぐり 伊能三郎右衛門家墓地」。『伊能忠敬研究』2012. 10. 12第66号p23(伊能楯雄)「香とりの日記」の頃
13	1754(宝暦04)	9	秋、ミチ(14歳)、母タミと伊能家に戻る	

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
14	1755. 02. 11(宝暦05. 01. 01)	10	「貞享暦(じょうきょうれき)」を、「宝暦暦(ほうれきれき・ほうりゃくれき)」に改暦。暦の出来が悪く、評判が悪かったため、のち改暦の機運が高まる	
15	1755(宝暦05)	10	ミチ(達)(15歳)を伊能家の跡取りと定め、親戚の伊能七左衛門清茂の五男、景茂(かげしげ。17歳)を婿に迎える	『伊能忠敬研究』2012. 10. 12第66号p23(伊能楯雄)「香とりの日記」の頃
16	1755(宝暦05)	10	小関三治郎(10歳)、約束通り、父の実家の神保家に引き取られ、神保三治郎として過ごす〔さらに、数学や経学医書を学んだと伝えられる〕	
17	1757(宝暦07)	12	父貞恒(47歳)、武射郡板川村(現山武市板川)の戸村惣右衛門の娘(1722(享保07)年生まれ。35歳)と再婚〔忠敬12歳〕	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p18
18	1757. 08. 09(宝暦07. 06. 25)	12	ミチ(17歳)の夫、景茂(かげしげ)没(19歳)。また、当主不在となる〔景茂は10代目として数えない。正式な家督相続前に死去したため〕	『伊能忠敬研究』2005. 08. 09第41号p36(小島一仁)「旌門金鏡類録(八)」
19	1757(宝暦07)	12	冬、景茂の遺児忠孝(ただたか)を、ミチが生む	
20	1762. 12. 19(宝暦12. 11. 05)	17	平山藤右衛門季忠〔タミの兄〕の養子(第四子)になった形とし、林大学頭(5代目)鳳谷に入門して忠敬(ただたか)の名乗(なのり)をもらう〔「門人平山季忠四子忠敬」と書かれている〕	『伊能忠敬研究』1998. 02. 01第14号p15(伊能陽子)「名乗書」〔現存〕。『伊能忠敬研究』2015. 10. 20第77号p21(前田幸子)「伊能忠敬周辺の人④平山藤右衛門季忠」
21	1763. 01. 21(宝暦12. 12. 08)	17	分家の伊能七郎右衛門豊秋〔1722～1772年〕と、平山藤右衛門季忠〔仮親とする〕との斡旋で、18歳〔満17歳〕で、伊能ミチ(達)(22歳)＜忠敬の1人目の妻＞に入り婿、伊能忠敬〔伊能家10代目〕となる。しばらくの間、伊能七郎右衛門豊秋が忠敬を扶補(補佐)。忠敬は通称、三郎右衛門〔ミチは、長女イネ(稲)、長男景敬、二女シノ(篠)の3人の子を生む〕	『伊能忠敬研究』1999. 04. 25第19号p27(小島一仁)「伊能豊秋日記(一)」。『伊能忠敬研究』1999. 07. 30第20号p18(小島一仁)「伊能豊秋日記(二)」。『伊能忠敬研究』2008. 11. 30第54号p27(佐久間達夫)「伊能達(みち)の婿選びに奔走した伊能豊秋(とよあき)」
22	1763. 10. 13(宝暦13. 09. 07)	18	ミチの先夫景茂との子、忠孝(ただたか)早世(7歳)	
23	1764(明和01)	19	父貞恒(54歳)、分家・独立、小堤村和田の地に住む。屋号「店(たな)」として、現在に至る	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p21・45
24	1764(明和01)	19	忠敬、はじめて江戸に行く	
25	1764. 12. 22(明和01. 11. 30)	19	高橋至時(よしとき)生まる	
26	1765(明和02)	20	冬、源六殿〔伊能忠敬〕、殊のほかむつかしき病氣(三四十日よきふとんにかかり〔床に就く〕)。光明真言祈祷百万遍を行なう	『伊能忠敬研究』1999. 11. 01第21号p8(小島一仁)「伊能豊秋日記(三)」
27	1768(明和05)	23	父貞恒(58歳)、信濃の善光寺に参詣、それを記念して阿弥陀如来座像を製作。これを機会に隠居したとみられる	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p48
28	1769. 07. 14(明和06. 06. 11)	24	佐原村牛頭天王(ござてんのう)祭礼〔祇園祭〕の山車の番次(ばんつぎ。引き出す順番)で紛争。伊能忠敬(25歳)、永沢次郎右衛門と義絶して、自分の町内を収める。1769. 07. 28(明和06. 06. 25)夜、和談成立	『伊能忠敬研究』2000. 02. 03第22号p9(小島一仁)「伊能豊秋日記(四)」
29	1769(明和06)	24	秋、江戸新川に薪問屋を出す。翌明和07. 08中旬、類焼(手持ちの薪七万駄を焼失)	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p50
30	1774. 12. 25(安永03. 11. 23)	29	タミ(ミチの母)没(52歳)。伊能家は真言宗の寺(観福寺)だが、タミのみ、日蓮宗の寺(浄国寺)の永沢治郎右衛門家の墓域内に葬られる。戒名「浄心院日昌大姉」	『伊能忠敬研究』2013. 02. 28第68号p14(伊能楯雄)「伊能忠敬史跡めぐり 伊能三郎右衛門家墓地」

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
31	1775. 01. 29(安永03. 12. 28)	29	佐原村河岸免許争い(1772(明和09)年)の記録、「佐原邑(むら)河岸(かし)一件」をまとめる。奉行吟味〔裁判〕に際し、6代目景利〔ミチ(達)の祖父〕が残した膨大な書類が、過去の河岸問屋運送業の証拠となって勝訴し、発奮。記録の重要性を知ったきっかけとされる	『伊能忠敬研究』2000. 07. 14第23号p14(小島一仁)「佐原邑河岸一件(さわらむらかしいっけん)(一)」。 『伊能忠敬研究』2000. 12. 20第24号p19(小島一仁)「佐原邑河岸一件(さわらむらかしいっけん)(二)」。 『伊能忠敬研究』2001. 04. 01第25号p26(小島一仁)「佐原邑河岸一件(さわらむらかしいっけん)(三)」
32	1778. 06. 22(安永07. 05. 28)	33	～安政07. 06. 21(1778. 07. 15)の24日間、奥州松島へ、妻ミチ(達)と旅行。「奥州紀行」を著す	『伊能忠敬研究』2017. 11. 30第83号p6(前田幸子)「奥州紀行を読む」
33	1778. 07. 09(安永07. 06. 15)	33	佐原村が、天領から、旗本津田氏単独の知行所となったため、この日、代官と津田家用人が佐原村に下向して、御引渡の手続き。忠敬は旅行中で不在のため、長女稲の婿養子の盛右衛門が代理で出席	『伊能忠敬研究』2004. 01. 30第35号p22(小島一仁)「旌門金鏡類録(二)」。 『伊能忠敬研究』2022. 02. 28第96号p56(玉造功)書籍紹介「近世佐原伊能家の記録「伝家」」(佐原古文書学習会刊行)の、安永06(1777)年は誤り
34	1781. 09. 25(天明01. 08. 08)	36	佐原村本宿組(ほんしゅくぐみ・ほんじゅくぐみ・ほんじくぐみ)名主となる(37歳)。津宮(つのみや)村(現香取市津宮)の久保木太郎右衛門清淵(くぼきせいえん)20歳〔1762～1829年〕に、儒教・暦学を学ぶため入門〔のち清淵は、伊能図製作に直接かわる。「御用」の幟の字や、忠敬肖像画の賛(さん)も清淵の筆〕	『伊能忠敬研究』2004. 01. 30第35号p23(小島一仁)「旌門金鏡類録(二)」。 『伊能忠敬研究』2005. 11. 09第42号p52(佐久間達夫)「伊能忠敬と久保木清淵との契(一)」。 『伊能忠敬研究』2016. 09. 30第80号p11(玉造功)「伊能忠敬像の画賛について」
35	1782(天明02. 01)	37	実父・神保貞恒死去(72歳)	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p52
36	1783. 08. 05(天明03. 07. 08)	38	浅間山大噴火(天明の浅間焼け)で砂降。利根川洪水、凶作(天明の大飢饉の始まり～1788(天明08)年)。伊能忠敬、堤防の修築に尽力する	
37	1783(天明03. 09)	38	領主の津田氏より苗字帯刀を許される(地元のみ有効)	
38	1784. 01. 21(天明03. 12. 29)	38	ミチ没(43歳)〔忠敬39歳〕。伊能家の真言宗の寺(観福寺)に葬られたが、母タミと同じく日蓮宗を信仰していたため、戒名「研心院妙唱日鏡大姉」には、日蓮宗で命名する「日」の文字が入っている	『伊能忠敬研究』2005. 08. 09第41号p15(新沢義博)「忠敬翁のふるさと佐原を訪ねて」
39	1784. 01. 21(天明03. 12. 29)	38	妙諦(20歳)(みょうてい)〔名前不詳。戒名の「心蓮妙諦信女」のみ伝わる。父は、伊能家の番頭(手代)・柏木(関場)幸七＝7代目伊能昌雄の三男として、1737(元文02)年生まる。柏木久兵衛家に養子入り。1803(享和03)年没(67歳)〕はミチ(達)没後、忠敬の内妻〔2人目の妻〕となる〔忠敬40歳〕〔妙諦は、二男秀蔵、三男順治、三女コト(琴)の3人の子を生む〕	
40	1784(天明04. 08)	39	佐原村本宿組名主から、村方後見〔名主の上座〕となる(40歳)	
41	1785(天明05)	40	父貞恒の後妻〔忠敬の継母〕死去(63歳)	伊藤一男『新考 伊能忠敬一九十九里から大利根への軌跡一』p53
42	1785(天明05)	40	高橋至時の長男、景保(かげやす)生まる〔至時22歳〕	
43	1786(天明06)	41	この年から翌年にかけて、関東、東北地方大洪水、飢饉。前年に関西で買い付けてあった米の一部を近隣に安く売り、窮民を救う(打ち壊しを防ぐ、忠敬の商人的合理精神)。残りを江戸で売り大利を得る	

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
44	1790. 07. 19(寛政02. 06. 08)	45	妙諦没(27歳)〔忠敬46歳〕。父方の柏木家の墓地〔伊能家の隣〕に葬られる	『伊能忠敬研究』2016. 02. 20第78号p38(柏木隆雄)「小説 林蔵と秀蔵(下)」
45	1790. 07. 21(寛政02. 06. 10)	45	近江国堅田藩主、堀田摂津守正敦(まさあつ。仙台藩主伊達宗村の八男。1755～1832年)、老中・松平定信〔1787(天明07)～1793(寛政05)年、寛政の改革を実行〕の引き立てで、若年寄となる(～1832年)。若年寄として、天文方を支配〔1747(延享04)年、天文方が、寺社奉行から若年寄の直轄となる〕	『伊能忠敬研究』2017. 06. 30第82号p4(前田幸子)「伊能忠敬周辺の人⑦堀田摂津守正敦」
46	1790(寛政02. 06)	45	仙台藩江戸詰の藩医・桑原隆朝の長女ノブ(信)を、継室〔正室の後妻。3人目の妻〕に迎える(46歳)。隆朝を通じて、幕府若年寄堀田摂津守正敦や、天文方との強力なパイプができる	『伊能忠敬研究』1997. 07. 20第12号p15(安藤由紀子)「伊能図のプロモーターたち」不思議な年次が二つある。寛永二年と七年である
47	1790(寛政02)	45	末、領主・津田氏に隠居を願うが許されず	『伊能忠敬研究』2000. 02. 03第22号p10(安藤由紀子)「二人の師 高橋至時(よしとき)と間(はざま)重富(つづき)」
48	1791. 10. 18(寛政03. 09. 21)	46	家訓(亥九月廿一日)を書き、家業の実務を長男景敬(1766年生まれ)(26歳)に任せる。家訓は、わずか三箇条と簡潔〔忠敬47歳〕	
49	1791(寛政03)	45	林子平、『海国兵談』の刊行終了。「およそ日本橋よりして欧羅巴(ヨーロッパ)に至る、その間一水路のみ」。幕政への容喙〔口出し。幕府の軍事体制の不備を批判〕はご法度であったため、翌年禁書となり、版木も没収された。最終的に蟄居となり死去。「親も無し 妻無し子無し版木無し 金も無けれど死にたくも無し」と嘆き、自ら六無斎(ろくむさい)と号した。「寛政の三奇人」の一人(「奇」は「優れた」という意味)	
50	1792. 03. 06(寛政04. 02. 14)	47	領主・津田氏から、永沢次郎右衛門とともに、三人扶持を与えられる(忠敬を地元に残すためか)	『伊能忠敬研究』2022. 02. 28第96号p56(玉造功)書籍紹介「近世佐原伊能家の記録「伝家」」(佐原古文書学習会刊行)
51	1792. 04. 09(寛政04. 閏02. 18)	47	江戸店の盛右衛門〔長女イネの女婿〕に、暦書の購入を依頼(暦学に凝り始める)	『伊能忠敬研究』1998. 02. 01第14号p4(川尻信夫)佐原時代の忠敬の「暦学」。『伊能忠敬研究』2000. 02. 03第22号p12(安藤由紀子)「二人の師 高橋至時(よしとき)と間(はざま)重富(つづき)」
52	1792(寛政04. 09)	47	ロシア使節ラクスマン〔ラックスマン〕、伊勢白子(しらこ)の漂流民、大黒屋光太夫〔1751～1828年〕を護送して、オホーツクから根室に来航し、通商を要求〔光太夫、10年後の帰国〕。翌年、幕府が長崎港の信牌を交付するが、長崎へは向かわずオホーツクに帰港した	
53	1793. 04. 08(寛政05. 02. 28)	48	～寛政05. 06、近隣の津宮(つのみや)村の名主・久保木清淵らとともに関西(伊勢、奈良、吉野、高野山、和歌浦、大坂、京都を訪れ、さらに高砂から四国金比羅参詣に船出するが引き返す)に旅行し、「旅行記」を書く。携帯用の方位盤や象限儀を持参したらしく、15箇所で方位測定、2箇所以北極出地度(緯度)測定の記録が残っている	鳴海風(なるみふう)『星に惹かれた男たち』p134。『伊能忠敬研究』2000. 02. 03第22号p13(安藤由紀子)「二人の師 高橋至時(よしとき)と間(はざま)重富(つづき)」。『伊能忠敬研究』2009. 08. 31第57号p32(佐久間達夫)「伊能忠敬、関西旅行の旅先で方位や緯度測定」。『伊能忠敬研究』2021. 06. 28第94号p25(玉造功)「携帯用磁石」
54	1794(寛政06)	49	頃、18年分の古暦〔未来の日付も含む〕を、自力で作成(暦学が相当程度上達)	

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
55	1794. 03. 28(寛政06. 02. 27)	49	幕府勘定奉行、「荒地起し返し御見分〔水害で放棄した耕地の復旧を目標とする視察〕」のため、佐原村に到着。忠敬は事前に、粉名口と南和田を中心とする利根川沿いを、五十間の間縄(けんなわ)で実測し、「自飯島村至篠原村下利根川沿実測図」を作成しておいた	『伊能忠敬研究』2005. 11. 09第42号p20(佐久間達夫)「佐原村粉名口付近実測図」。『伊能忠敬研究』2009. 08. 31第57号p36(佐久間達夫)「伊能忠敬、関西旅行の旅先で方位や緯度測定」。『伊能忠敬研究』2019. 06. 28第88号p5(玉造功)「下利根川沿実測図」
56	1795. 01. 01(寛政06. 閏11. 11)	49	大槻玄沢(磐水(ばんすい)〔1757～1827年〕自宅の塾「芝蘭堂(しらんどう)」で、洋学者が「おらんだ正月」を祝う(江戸で初めて)。門人市川岳山の絵「芝蘭堂新元会図(しらんどうしんげんかいず)」で有名(大黒屋光太夫が招かれている)。玄沢の長男玄幹(磐里(ばんり))。1785. 10. 11(天明05. 09. 09)～1838. 01. 08(天保08. 12. 13)、満52歳)が没する1838年までの、計44回開催された〔2回目以降は、冬至から数えて第11日目に開催した〕	
57	1795(寛政06. 12)	49	寛政06. 10に出した隠居願が聞き届けられ、50歳〔満49歳〕で家督を景敬に譲り、通称を勘解由(かげゆ)と改める。暦学に突き進む	
58	1795. 05. 02(寛政07. 03. 14)	50	ノブ没(江戸の父のもとで療養中)	『伊能忠敬研究』1998. 05. 16第15号p14(安藤由紀子)「お信さん(つづき)」
59	1795. 05. 06(寛政07. 03. 18)	50	幕府より、大坂の、高橋至時と間重富(はざましげとみ)に、暦局への召し出し〔暦学御用〕正式命令(最初、麻田剛立(あさだごうりゅう。1734. 03. 10(享保19. 02. 06)～1799. 06. 25(寛政11. 05. 22))への要請だったが、高齢のため、門下のふたりを推薦)	鳴海風(なるみふう)『星空に魅せられた男 間重富』くもん出版2011. 03. 16初版第1刷p307「間重富年譜」。鳴海風(なるみふう)『星に惹かれた男たち』p69
60	1795(寛政07. 04)	50	高橋至時(32歳)〔満30歳。1764. 12. 22(明和01. 11. 30)生まれ〕、すぐ大坂を出発し、暦局に到着。寛政07. 11天文方に任じられるまで、安部摂津守邸に寄寓した	鳴海風(なるみふう)『星に惹かれた男たち』p73・138。『伊能忠敬研究』2015. 06. 20第76号p3(前田幸子)「小宮山楓軒『懷宝日札』を読む」
61	1795. 06. 15(寛政07. 04. 28)	50	高橋至時、測量御用手伝を拝命	平井松午(しょうご)『伊能忠敬の地図作製－伊能図・シーボルト日本図を検証する－』古今書院2022. 02. 28初版第1刷p18
62	1795(寛政07. 05)	50	江戸に出て、深川黒江町(現江東区門前仲町)の、柏木幸七の店〔幸七は伊能家の番頭(手代)〕に仮寓す。隠宅と称す(51歳)〔満50歳〕	『伊能忠敬研究』2017. 06. 30第82号p45(柏木隆雄)「忠敬、江戸仮住い」
63	1795. 07. 23(寛政07. 06. 08)	50	間重富(はざましげとみ。40歳)〔1756. 04. 07(宝暦06. 03. 08)～1816. 04. 21(文化13. 03. 24)〕も暦局に入り、高橋至時とともに、改暦に当たる(寛政07. 05. 16大坂出発、06. 02江戸着)〔忠敬が至時に入門後、至時の不在時には、重富が教えている〕	鳴海風(なるみふう)『星空に魅せられた男 間重富』くもん出版2011. 03. 16初版第1刷p199。『伊能忠敬研究』2013. 09. 15第70号p34(渡辺一郎)「新説 伊能忠敬物語 第一話 伊能忠敬はなぜ測量をはじめたか(1)」では、05. 16大坂出発、06. 02江戸着

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
64	1795(寛政07.08頃)	50	51歳〔満50歳〕で、幕府天文方(暦局)・高橋至時(32歳)〔満30歳〕の弟子となる。深川黒江町(現江東区門前仲町)の隠宅より、浅草の暦局(現都営浅草駅付近)に通う。毎日の天体観測にのめり込み「推歩先生」のあだ名をもらう〔推歩(すいほ)＝星の動き(天文現象)の予報計算〕	『伊能忠敬研究』1998.02.01第14号p10(安藤由紀子)「お信さん(つづき)」。『伊能忠敬研究』1998.05.16第15号p13(安藤由紀子)「お信さん(つづき)」 ※この隆朝は、若年寄の堀田摂津守正敦(まさあつ。仙台藩主伊達宗村の八男。1755～1832年。1790～1832年若年寄)と、強いコネがあったと推察される。隆朝はこののちも、このコネを生かして、測量命令の実現など、尋常でない肩入れをして忠敬を助けているく『伊能忠敬研究』1998.08.10第16号p13(安藤由紀子)「桑原隆朝」。『伊能忠敬研究』1998.11.30第17号p14(安藤由紀子)「桑原隆朝(つづき)」。『伊能忠敬研究』1999.01.31第18号p13(安藤由紀子)「桑原隆朝(つづき)」。『伊能忠敬研究』2016.09.30第80号p27(前田幸子)「伊能忠敬周辺の人⑥桑原隆朝朝純」。『伊能忠敬研究』2017.06.30第82号p4(前田幸子)「伊能忠敬周辺の人⑦堀田摂津守正敦」
65	1795.11.22(寛政07.10.11)	50	高橋至時の妻シメ(志勉)、景保(かげやす、11歳)、景佑(かげすけ、9歳)と、3人の女子の、計5人を残して死去(28歳)。至時〔32歳〕、多忙のため、葬儀に帰坂できず	『伊能忠敬研究』1999.07.30第20号p8(安藤由紀子)「二人の師 高橋至時(よしとき)と間(はざま)重富(つづき)」
66	1795.12.24(寛政07.11.14)	50	高橋至時、同心より一躍、正式に天文方となる	鳴海風(なるみふう)『星に惹かれた男たち』p73・138。 『伊能忠敬研究』1999.07.30第20号p8(安藤由紀子)「二人の師 高橋至時(よしとき)と間(はざま)重富(つづき)」
67	1796.09.06(寛政08.08.05)	51	幕府、天文方に、正式に改暦御用を命ずる	鳴海風(なるみふう)『星に惹かれた男たち』p139
68	1797.11.21(寛政09.10.04)	52	忠敬、偶然、白昼に金星の南中を観測(日本初)	鳴海風(なるみふう)『星に惹かれた男たち』p140。『伊能忠敬研究』2000.07.14第23号p25(安藤由紀子)「伊能図の三人」
69	1797(寛政09.11)	52	ロシア人、択捉島に上陸	
70	1798.02.16(寛政10.01.01)	53	「宝暦暦(ほうれきれき・ほうりゃくれき)」を、「寛政暦(かんせいれき)」に改暦〔高橋至時と間重富が作成。清の『暦象考成(れきしょうこうせい)後編』を読み解き、西洋の暦法を初めて取り入れた暦〕	
71	1798(寛政10)	53	エイ(栄)〔4人目の妻。常陸国清水村(現潮来市牛堀の清水地区)の旧家(水戸藩南部潮来領16ヶ村を支配する「大山守」を勤役した家柄)大崎次郎兵衛家の娘・大崎栄〕、江戸で、忠敬の内縁の妻となる〔四書五経を白文で読み、数学も理解し、天測や地図製作も助けた才女。数年して忠敬のもとを去り、30歳頃、漢学者山本北山の門人となる〕	
72	1798(寛政10.07)	53	近藤重蔵・最上徳内、国後島と択捉島を調査し、ロシアに対抗するため、択捉島北端(のち薬取郡薬取村カモイワッカ岬)に「大日本恵登呂府」の木柱を建立(1930(昭和05)年、御影石の記念碑に建て替え)	

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
73	1798. 12. 23(寛政10. 11. 17)	53	和算家・会田安明〔1747～1817年〕、伊能忠敬の隠宅で、北極星の高度と、太陽の南中高度の観測体験をさせてもらう。当初は、寛政10. 11. 15＝冬至の日に観測予定なるも、当日も翌日も雨天のため、この日11. 17となった	平井松午(しょうご)『伊能忠敬の地図作製－伊能図・シーボルト日本図を検証する－』古今書院2022. 02. 28 初版第1刷p23会田安明『天文簡要論 下冊』
74	1799. 02. 20(寛政11. 01. 16)	54	幕府、知内川以東の東蝦夷地〔太平洋沿岸〕の告知(あげち)を松前藩に命じ、幕府の直轄地とする	
75	1799(寛政11. 06)	54	～寛政11. 11、暦局出向の津和野藩士・堀田仁助、奥州と蝦夷地南岸を概測	
76	1799(寛政11)	54	末頃から、高橋至時、蝦夷地測量を働き掛ける。景敬、地元民より幕府評定所へ箱訴(忠敬の天明饑饉での功績に対し、苗字・帯刀の許可を願う)させ、側面から援助(忠敬が武士でないのが一つの障害として)	
77	1800(寛政12. 02)	55	頃、幕府、忠敬の蝦夷地測量許可をだいたい決めるが、延々と書類審査をつづける	
78	1800. 04. 30(寛政12. 04. 07)	55	御書院番頭松平信濃守忠明〔蝦夷地取締御用掛〕宅にて、松平信濃守、勘定奉行石川将監、目付羽太庄左衛門と直接対面しての、口頭面接。帰りに、先年堀田仁助の作った絵図を貸してくださる。1800. 05. 03(寛政12. 04. 10)、「お借りした地図は測量されていない所もあり、地図は連続して測量されていないと意味がありません」との主旨の勘弁書〔説明書〕を同封し、霊巖島の蝦夷会所へ持参し返却。このうち、「人足賃の足りない部分は自費でまかしますので、道中測量に差し支えないよう、御添触だけは宜しくお願いします」という主旨の「以書付奉申上候」で、一件落着した	『伊能忠敬研究』1998. 11. 30第17号p17(安藤由紀子)「桑原隆朝(つづき)」第1次測量出発前のトラブル。 『伊能忠敬測量日記 第1巻』第1次測量 幕府への交渉記p11～22
79	1800. 05. 28(寛政12. 閏04. 05)	55	佐原村の領主津田山城守信久に、蝦夷地御用について報告	『伊能忠敬研究』2023. 02. 28第99号p7(玉造功)「国宝紹介『仏国暦象編』と『暦象編斥妄』」(円通著『仏国暦象編』は1810(文化07)年刊で、須弥山を中心とする天動地平説に天体現象を位置づけた独自の仏教天文学。伊能忠敬著『暦象編斥妄』は第10次測量〔1816. 12. 11(文化13. 10. 23)終了〕後の著述で、忠敬唯一の論文＝『仏国暦象編』に対する反論)
80	1800. 06. 06(寛政12. 閏04. 14)	55	幕府より伊能忠敬へ、第1次測量命令の文書「御添触(おそえぶれ)」を渡す。「高橋作左衛門〔高橋至時〕弟子 西丸御小姓組番頭 津田山城守知行所 下総国香取郡佐原村元百姓 浪人 伊能勘解由〔宛〕 その方儀兼々(かねがね)心願のとおり、測量試みとして、蝦夷地へ差し遣わされ候間、入念あい勤めるべく候 右につき御用中、お手当として、一日銀七匁(もんめ)五分(ぶ)宛(あて)これを下さる 申 閏四月」	『伊能忠敬測量日記 第1巻』第1次測量 幕府への交渉記p26
81			-----	
82			＝＝＝寛政12. 閏04. 19(1800. 06. 11)開始～文化13. 10. 23(1816. 12. 11)終了の、あしかけ17年、10次にわたる、合計3754日に及ぶ測量〔忠敬 56～72歳(満55～71歳)〕＝＝＝	
83			※歩測は第1次のみ。第2次からは間縄(けんなわ)、鉄鎖(てっさ)(鉄鎖は毎日、間棹(けんざお)で検定した)を使用し、歩測は止めた	
84			※「①～⑩」は「第1次～第10次」。下記%は所要日数比率	

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
85			※第1～2次 計 410日〔10.9%〕 忠敬の個人事業で費用大幅持ち出し	
86			※第3～4次 計 351日〔9.4%〕 忠敬の個人事業だが費用トントン	
87			※第5～10次 計2993日〔79.7%〕 西日本測量は、幕府の事業となる	
88			※第1～10次 計3754日〔100.0%〕	
89	1800. 06. 11(寛政12. 閏04. 19)	55	～寛政12. 10. 21(1800. 12. 07)の180日間＝伊能忠敬(56歳)〔満55歳〕第1次測量《①奥州街道・蝦夷地東南岸西別(現別海町本別海)まで》。『測量日記』の書き出しは、「閏四月十九日、朝五ッ前深川〔黒江町の隠宅〕出立。上下六人、伊能勘解由、門倉隼太〔高橋至時の従臣〕、平山宗平〔タミの兄・平山季忠の孫。平山郡蔵の弟〕、伊能秀蔵〔妙諦の子〕、下人佐原吉助、新に召かかえ候長助なり。此日朝より小雨、昼後に止。深川八幡宮〔富岡八幡宮〕参詣。夫〔それ〕より両国通り浅草司天台〔暦局〕へ立寄、高橋先生〔高橋至時〕にて御酒を給。荷物は深川より直に千住宿へ積送。此日千住宿送別の人は〔人名省略。忠敬推奨の優秀な測器製作者、神田時斗師〔神田の時計師大野〕弥五郎・弥三郎の名前が見える〕。千住宿にて不残中食、酒肴を以〔もって〕宴別。千住より草加宿へ二里〇八丁〔八町〕、草加より越谷へ一里廿八丁〔二十八町〕、越谷と並ぶ番駅の大沢宿〔越谷宿は、元荒川右岸の越谷と、左岸の大沢の、二つの町の宿場町〕に七ッ頃着して、中嶋屋善太郎と云う家に止宿」。緯度1度を27里と算出したが、忠敬自信無し	
90	1801. 03. 13(寛政13. 01. 29)	56	天明年間の窮民救済の功績により、幕府勘定奉行から、苗字帯刀を許される〔幕府からの苗字帯刀ともなれば、全国に通用する〕	『伊能忠敬研究』1999. 01. 31第18号p14(安藤由紀子)「桑原隆朝(つづき)」。『伊能忠敬研究』1997. 11. 10第13号p17(伊能陽子)「箱訴状」。『伊能忠敬研究』2005. 02. 25第39号p25(小島一仁)「旌門金鏡類録(六)」
91	1801. 05. 14(享和01. 04. 02)	56	～享和01. 06. 06(1801. 07. 16)の64日間＝伊能忠敬第2次測量《②-1相模・伊豆》	
92	1801. 07. 29(享和01. 06. 19)	56	～享和01. 12. 07(1802. 01. 10)の166日間＝伊能忠敬第2次測量《②-2本州東海岸・奥州街道再測量》。緯度1度を28.2里と算出。1里＝36町、1町＝60間、1間＝6尺、1尺＝10寸、1寸＝10分、1分＝3.030303mmなので、28.2里＝28.2×36×60×6×10×10×3.030303mm＝約110.75km。緯度35度付近の正確な距離は、約110.95kmなので、わずかに0.2%の誤差	『伊能忠敬の日本地図』p39
93	1802. 07. 10(享和02. 06. 11)	57	～享和02. 10. 23(1802. 11. 18)の132日間＝伊能忠敬第3次測量《③出羽・越後》。第3次測量でも、緯度1度は28.2里	
94	1803. 04. 16(享和03. 02. 25)	58	～享和03. 10. 07(1803. 11. 20)の219日間＝伊能忠敬第4次測量《④東海・北陸・越後》。糸魚川でトラブル	
95	1804. 02. 15(享和04. 01. 05)	59	伊能忠敬の師、高橋至時病没(41歳)〔満39歳〕	
96	1804. 05. 12(文化01. 04. 03)	59	高橋至時の長男、景保(かげやす。20歳)〔1785(天明05)年大坂生まれ〕、天文方に任ぜられる〔文化01. 10、間重富、再度出府して暦局入り(文化01. 10. 04大坂出発、10. 17江戸着)。景保を補佐〕	鳴海風(なるみふう)『星空に魅せられた男 間重富』くもん出版2011. 03. 16初版第1刷p309「間重富年譜」。『伊能忠敬研究』2002. 03. 30第28号p25(安藤由紀子)「文化元年(一八〇四年)のこと」
97	1804. 09. 04(文化01. 08. 01)	59	日本東半分の沿海地図が上呈され、江戸城大広間で接合して老中たちが閲覧	
98	1804. 10. 09(文化01. 09. 06)	59	日本東半分の沿海地図、将軍家斉(1773～1841年)が上覧	

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
99	1804. 10. 13(文化01. 09. 10)	59	伊能忠敬、幕臣に登用され、天文方高橋景保(かげやす。至時の子)の手付となる	
100	1805. 03. 25(文化02. 02. 25)	60	～文化03. 11. 15(1806. 12. 24)の640日間＝伊能忠敬第5次測量《⑤畿内・紀伊・中国(山陽山陰)沿岸と瀬戸内海の島々》。岡山で越年	
101	1808. 02. 21(文化05. 01. 25)	63	～文化06. 01. 18(1809. 03. 03)の377日間＝伊能忠敬第6次測量《⑥四国・大和》。伊勢山田で越年	
102	1808. 10. 19(文化05. 08. 30)	63	高橋至時の二男、景佑(かげすけ)〔1787. 11. 24(天明07. 10. 15)大坂生まれ～1856. 07. 21(安政03. 06. 20)〕、天文方・渋川正陽(まさてる)の養嗣子、渋川景佑となる	鳴海風(なるみふう)『星空に魅せられた男 間重富』くもん出版2011. 03. 16初版第1刷p310「間重富年譜」
103	1809(文化06. 06)	64	～文化06. 08、間宮林蔵、樺太・沿海州アムール川下流を探検。樺太が島であることを実証。1810(文化07)年、『東韃地方紀行』を著す	
104	1809(文化06)	64	高橋景保は幕府の命により、伊能図をもとに「日本輿地図藁(にほんよちずこう)」〔北海道を除く日本全域を一葉のもとに描く仮製日本全図〕を作成	
105	1809. 10. 06(文化06. 08. 27)	64	～文化08. 05. 08(1811. 06. 28)の631日間＝伊能忠敬第7次測量《⑦九州東南部・中国内陸部》。豊前小倉・大分で越年	
106	1810. 05. 15(文化07. 04. 13)	65	イネ〔48歳〕の夫、盛右衛門死去〔56歳〕。イネは、平山家の檀那寺である浄妙寺(日蓮宗)〔香取郡多古町〕で出家・剃髪し、名を妙薫〔法名〕と改める。親戚故旧を通じて、測量先の父に、勘当を解いてもらう詫び状を出す	『伊能忠敬研究』2004. 11. 19第38号p18(佐久間達夫)「稲」は伊能忠敬に勘当されたか
107	1810. 12. 11(文化07. 11. 15)	65	忠敬、長女イネ〔妙薫〕の勘当(久離)を解く許し状を、旅先で書く。イネ、佐原本家に帰り、留守宅の面倒を献身的にみる	
108	1811. 07. 09(文化08. 05. 19)	66	間宮林蔵、江戸で忠敬宅をしばしば(「忠敬江戸日記」で8回)訪問し、測量術を学ぶ〔この時、忠敬が林蔵に、蝦夷地の未測量部分を頼んだのではないかと思われる〕	『江戸の伊能忠敬－伊能忠敬銅像建立報告書 保存版－』p112「江戸日記 第三」
109	1812. 01. 09(文化08. 11. 25)	66	伊能忠敬、出立に際し、間宮林蔵の求めに応じて「贈間宮倫宗序」を贈る	『伊能忠敬研究』2015. 10. 20第77号p36(柏木隆雄)「小説 林蔵と秀蔵(上)」では、前夜だが、出立の当日しか、渡すタイミングがなかったと思われる
110	1812. 01. 09(文化08. 11. 25)	66	～文化11. 05. 23(1814. 07. 10)〔実際は前日の、文化11. 05. 22に帰着らし〕の914日間〔実際は913日間〕＝伊能忠敬第8次測量《⑧九州残部・屋久島種子島・中国内陸部》。摂津郡山(現大阪府茨木市)・肥前賤津浦(しずのうら。現佐世保市相浦町)・姫路で越年。実際の帰着日を採るとすれば、合計 3753日 となる	
111	1813. 07. 04(文化10. 06. 07)	68	長男景敬(かげたか)没(48歳)〔忠敬九州測量中69歳、忠誨8歳、鋈之助4歳〕	
112	1813. 08. 10(文化10. 07. 15)	68	副隊長の坂部貞兵衛、五島列島の福江で病没(42歳)	
113	1814(文化11)	69	高橋景保〔30歳〕、御書物奉行を兼任	
114	1814(文化11)	69	イネ〔妙薫〕、佐原より、江戸宅に出る〔52歳〕	
115	1814. 07. 19(文化11. 06. 03)	69	深川黒江町から、八丁堀亀島町〔桑原隆朝宅跡〕に引っ越し、「地図御用所」とする	『伊能忠敬研究』2002. 03. 30第28号p47(佐久間達夫)「伊能忠敬の江戸在住日記(七)」
116	1815. 03. 13(文化12. 02. 03)	70	～文化12. 02. 19(1815. 03. 29)の17日間＝伊能忠敬第10次測量《⑩-1江戸府内幹線測量》。忠敬参加の最後	

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
117	1815. 06. 04(文化12. 04. 27)	70	～文化13. 04. 12(1816. 05. 08)の340日間＝伊能忠敬第9次測量《⑨伊豆諸島》。忠敬不参加(内弟子が測量)	
118	1816. 09. 29(文化13. 閏08. 08)	71	～文化13. 10. 23(1816. 12. 11)の74日間＝伊能忠敬第10次測量《⑩-2江戸府内細測》。伊能忠敬、孫忠誨を伴いときどき出勤〔忠敬72歳(満71歳)。忠誨11歳〕	
119	1816. 12. 11(文化13. 10. 23)	71	これで測量が終了したので、大日本沿海輿地全図(だいにほんえんかいよちぜんず)の作成にとりかかる	
120			-----	
121	1817. 11. 23(文化14. 10. 15)	72	間宮林蔵、江戸の忠敬宅に泊まり込み〔蝦夷地のデータの引き渡し。忠敬は内容を精査し、忠敬測量部分も、林蔵データの全面採用を指示したと思われる〕	『江戸の伊能忠敬－伊能忠敬銅像建立報告書 保存版－』p150「江戸日記 第五」
122	1818. 05. 17(文化15. 04. 13)	73	江戸八丁堀亀島町の自宅で忠敬死去(74歳)〔満73歳〕。喪を秘して地図制作を続行〔文政への改元は文政01. 04. 22なので、文化15. 04. 13が正当〕。「地図御用所」の管理と、孫忠誨(13歳)の世話は、忠敬の長女妙薫〔イネ〕が行なった	『伊能忠敬研究』2018. 11. 07第86号p21(玉造功)「深川の法乗院」忠敬の死
123	1818. 05. 26(文政01. 04. 22)		文化から文政に改元	
124	1821. 04. 29(文政04. 03. 27)		忠誨、元服(16歳)	『伊能忠敬研究』1997. 01. 31第10号p24(伊能陽子)「源空寺墓碑建立始末」。『伊能忠敬研究』2003. 10. 26第34号p46(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(三)」
125	1821. 07. 04(文政04. 06. 05)		〔「大日本沿海実測録」14巻の巻首の〕序文下書、津ノ宮より来る〔久保木清淵起稿、昌平黌の佐藤一斎添削〕	『伊能忠敬研究』2003. 10. 26第34号p48(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(三)」。『伊能忠敬研究』2005. 11. 09第42号p53(佐久間達夫)「伊能忠敬と久保木清淵との契(一)」
126	1821. 08. 07(文政04. 07. 10)		「大日本沿海輿地全図(だいにほんえんかいよちぜんず)」〔大図214枚(30軸6箱)、中図8枚(2軸)、小図3枚(1軸)〕と「大日本沿海実測録」〔首1巻+13巻〕を、高橋景保と忠敬の孫忠誨(16歳)が上呈。江戸城大広間で、京都より西の大図・中図・小図を接続展示。この時は、将軍の上覧はなかったらしい ※縮尺は、大図1/36000＝1里を3寸6分(約3. 927kmを109. 09mm)、中図1/216000＝1里を6分(約3. 927kmを18. 18mm)、小図1/432000＝1里を3分(約3. 927kmを9. 09mm)〔1里＝36町、1町＝60間、1間＝6尺、1尺＝10寸、1寸＝10分、1分＝3. 030303mmなので、1里＝36×60×6×10×10×3. 030303mm＝約3. 927km〕	『伊能忠敬研究』2003. 10. 26第34号p49(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(三)」 ※縮尺は、大図1/36000＝1里を3寸6分(約3. 927kmを109. 09mm)、中図1/216000＝1里を6分(約3. 927kmを18. 18mm)、小図1/432000＝1里を3分(約3. 927kmを9. 09mm)〔1里＝36町、1町＝60間、1間＝6尺、1尺＝10寸、1寸＝10分、1分＝3. 030303mmなので、1里＝36×60×6×10×10×3. 030303mm＝約3. 927km〕
127	1821. 09. 29(文政04. 09. 04)		忠誨、伊能忠敬の死亡を届け、喪を発する	『伊能忠敬研究』2018. 11. 07第86号p21(玉造功)「深川の法乗院」忠敬の死の公表。『伊能忠敬研究』1997. 04. 01第11号p17(伊能陽子)「源空寺墓碑建立始末その二」病死届・忌服届
128	1821. 12. 07(文政04. 11. 13)		「大日本沿海輿地全図」と「大日本沿海実測録」のすべてが、紅葉山文庫に正式に入庫<幕府御書物方日記>	幕府御書物方日記

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
129	1822. 10. 08(文政05. 08. 24)		イネ〔妙薫〕、江戸亀島町で死去(60歳)(忠誨17歳)。戒名は、観福院の伊能家の墓には「楞嚴院體常妙實大姉」、片貝の盛右衛門の墓には「華香院妙薫日明」(浄妙寺で出家したときの法名。日蓮宗で命名する「日」の文字が入っている)と刻まれている	『伊能忠敬研究』2004. 08. 20第37号p56・61(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(六)」。 『伊能忠敬研究』2004. 11. 19第38号p18・21(佐久間達夫)「稲」は伊能忠敬に勘当されたか。 『伊能忠敬研究』2011. 05. 20特集号p14・16(戸村茂昭)「【講演】伊能忠敬の長女・お稲の血筋についての新事実」。 『伊能忠敬研究』2013. 02. 28第68号p14(伊能楯雄)「伊能忠敬史跡めぐり 伊能三郎右衛門家墓地」。 『伊能忠敬研究』2015. 10. 20第77号p24(前田幸子)「伊能忠敬周辺の人④平山藤右衛門季忠」
130	1822. 12. 21(文政05. 11. 09)		忠誨、江戸亀島町から佐原に到着、父〔景敬〕の跡を継ぐ(17歳)。こののち、佐原と江戸との二重生活となる	『伊能忠敬研究』2004. 11. 19第38号p60・65(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(七)」
131	1823. 01. 26(文政05. 12. 15)		忠誨、佐原で月食観測。こののちも、月食など観測す	『伊能忠敬研究』2004. 11. 19第38号p62・65(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(七)」
132	1823. 02. 10(文政05. 12. 30)		忠敬の墓石に刻まれる碑文(漢文)成り、佐原に届く。儒学者の佐藤一斎(大学頭・林述斎の第一の門人)の文、関研(せきけん。関藍梁)の書、名匠石工の広瀬群鶴(通称泉屋喜右衛門)の刻	『伊能忠敬研究』1997. 04. 01第11号p17(伊能陽子)「源空寺墓碑建立始末その二」。 『伊能忠敬研究』2003. 10. 26第34号p32(伊能陽子)「源空寺の忠敬墓碑銘拓本」
133	1823. 05. 24(文政06. 04. 14)		浅草源空寺に、忠敬の墓碑「東河伊能先生之墓」を建立(忠誨18歳)	『伊能忠敬研究』1997. 04. 01第11号p18(伊能陽子)「源空寺墓碑建立始末その二」。 『伊能忠敬研究』2002. 03. 30第28号p52(永野達代)「誰が源空寺の忠敬墓を建立したか」
134	1823. 06. 05(文政06. 04. 26)		忠誨18歳、笹目クニと結納	『伊能忠敬研究』2004. 11. 19第38号p65(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(七)」
135	1823. 08. 12(文政06. 07. 07)		シーボルト〔1796～1866年〕オランダ商館医師として、長崎出島に上陸〔ドイツ人だが、日本文化研究のため、オランダ人と詐称して来日〕	
136	1825. 04. 10(文政08. 02. 22)		佐原にて、星方図、座線、宿線等皆出来る。但し書入ればかり残る。右は重太郎に頼む〔忠誨担当の星図について、最後の仕上げを足立重太郎に託す〕	『伊能忠敬研究』2005. 02. 25第39号p50(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(八)最終回」。 『伊能忠敬研究』2006. 02. 20第43号p14(荻原哲夫)「もうひとつの伊能図ー忠誨(ただのり)星図ー」
137	1826. 07. 10(文政09. 06. 06)		長女テイ(貞)、生まる〔父忠誨21歳、母クニ18歳〕	『伊能忠敬研究』2005. 02. 25第39号p51(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(八)最終回」
138	1826. 08. 04(文政09. 07. 01)		兼(かね)て製造之中星儀、当朔日献上ニ相成。不朽に御文庫〔紅葉山文庫〕に相収り〔中星儀担当の足立重太郎から、忠誨宛の、文政09. 07. 21付け書簡〕	『伊能忠敬研究』2006. 02. 20第43号p16(荻原哲夫)「もうひとつの伊能図ー忠誨(ただのり)星図ー」
139	1826. 08. 29(文政09. 07. 26)		テイ没(1歳)。わずか51日間の、はかない命	『伊能忠敬研究』2005. 02. 25第39号p52(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(八)最終回」

	西暦年月日(旧暦年月日)	忠敬 満年齢	ことがら	参考文献
140	1827. 03. 09(文政10. 02. 12)		忠誨(ただのり)没(22歳)。伊能三郎右衛門家はまたもや、約30年間断絶することとなる	『伊能忠敬研究』2003. 04. 22第32号p1(佐久間達夫)「伊能忠誨日記(いのうただのりにっき)の連載について」。『伊能忠敬研究』2005. 02. 25第39号p52(佐久間達夫)「伊能忠誨(いのうただのり)日記(ハ)最終回」の「二月二日」は誤り。『伊能忠敬研究』2007. 05. 07第48号p22(佐久間達夫)「未完の天文暦学者 伊能忠誨」
141	1844. 02. 18(天保15. 01. 01)		「寛政暦(かんせいれき)」を、「天保暦(てんぽうれき)」に改暦。渋川景佑〔高橋景保の実弟〕が作成した、日本の歴史上、最も精密な暦で、日本最後の太陰太陽暦となった	